マッチングアプリの利用とリスクのある性交経験との関連[1]

古　村　健太郎[2]
松　井　　豊[3]

要　約

本研究は、マッチングアプリの利用経験とリスクのある性交経験との関連を検討することと、マッチングアプリ利用の心理的背景を検討することを目的としたWebパネル調査を行った。調査対象は、18－29歳の484名（男性239名、女性245名）であった。分析の結果、男女ともに恋人がいる人との性交、恋人以外の人との性交、見知らぬ人との性交の経験といったリスクのある性交経験は、アプリ利用経験がある場合に多かった。また、男性では金銭を支払った性交が、女性では既婚者との性交、首締めなどの危険な性交、金銭を受け取った性交、性病の感染経験が、アプリ利用経験がある場合に多かった。心理特性については、アプリ利用経験がある人は、賞賛獲得欲求やぬくもり希求の得点が高かった。これらの結果から、マッチングアプリの利用経験とリスクのある性交との関連について議論した。

1．問題と目的

本論文では、青年および成人（18歳から29歳）におけるマッチングアプリ（出会い系アプリ）の利用とリスクある性交経験との関連を明らかにし、マッチングアプリを利用する心理的背景を検討することを目的とする。

1－1　青年における性行動の不活発化

現代日本における青年や成人の性行動に関しては、時代による変化が大きく起こっていることが明らかになっている。例えば、AIDS/STI related database Japanは、高校2年生の性交経験率に関する3種類の調査の結果をまとめて、1987年から2009年までの推移を検討した。その結果、1980年代から急激に増加した性交経験率は、男子では1999年（34％）、女子では2002年（41％）に頂点を示した後、急激に低下し、2009年には男女ともに2割以下（男性15％、女性20％）となっていた。

2009年以降に発表された調査データをみても、同様の傾向が確認できる。東京都幼・小・中・高・心性教育研究会（2014）は、1981年以降、東京都内の小学校、中学校、高等学校の児童や生徒の性行動や性意識の調査を実施した。2013年の高校生の結果をみると、性交経験のない高校生の比率が、2005年と2008年は男女とも70％前後であったのに対し、2014年には男女とも85％前後に上がっていた。また、日本性教育協会は1974年から6年ごとに、「青少年の性行動全国調査」を実施している。この調査の結果をみると、高校生の性交経験率は、1974年には男女とも10％前後であったのに対し、2005年には男子27.6％、女子30.0％に達していた。しかし、2011年は男子14.6％、女子22.5％に低下し、2017年は男子

[1] 本研究はJSPS科研費JP19K14409の助成を受けて行われた。
[2] 弘前大学人文社会科学部
[3] 筑波大学

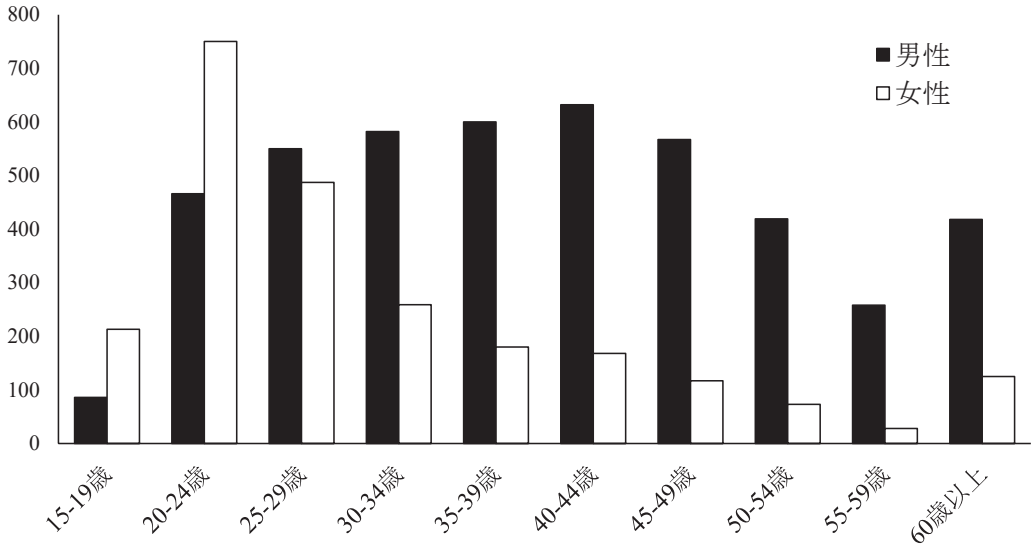

Figure 1　2018 年の梅毒感染者の年齢別構成

（単位：人。厚生労働省（2019）をもとに作成した。）

13.6％、女子 19.3％とさらに微減していた（片瀬，2019）。

以上は高校生の性交経験率であるが、大学生や成人に関しても同様の傾向が見られる。「青少年の性行動全国調査」の大学生の性交経験率を見ると、1974 年（男子 23％、女子 11％）から 2006 年（男子 63％、女子 62％）に急増した後、2011 年から下がり始め、2017 年には男子 47％、女子 37％まで低下していた。また、2015 年に行われた成人に対するウェブ調査と面接調査の結果を分析した小林（2019）は、男性では若いほど恋愛経験者が少ないという草食化傾向があるのに対し、女性では若い層ほど恋愛経験者が同じか多くなっており、やや肉食化している傾向があることを報告した。

このような 2000 年前後に始まった性交経験率の低下は、「草食化」（森岡，2011）や「性行動の消極化」、「性の不活発化」と捉えられ、その背景には経済的自立意識や愛情規範の強さが指摘されている（石川，2019）。同じ現象を、松井（2016）は、性の不活発化は 1995 年以前の水準に戻っただけであり、1995 年から 2002 年に高校生であった世代が性に活発なコホートであったと推定している。

１－３　青年における性行為感染症の増加

しかし、2013 年以降には、こうした性行動の不活発化とは異なる現象が現れている。すなわち、性感染症の増加である。厚生労働省の感染症動向調査（厚生労働省，2019）によると、2013 年以降梅毒の患者数は急増しており、2012 年が 875 人、2013 年が 1228 人、2018 年が 7001 人と、この 6 年間で 9 倍近くに増加していた。都道府県別の報告数（日本医師会，2019）では、東京都と大阪府に多くなっていた。2018 年の患者数を年齢別にみると（Figure １）、男性は 20 歳代から 60 歳以上まで広範囲にわたっているのに対し、女性は 20 歳代に集中している。

2013 年以降の梅毒の感染増加とともに、梅毒の感染経路にも大きな変化が生じている。Sugishita, Kayebeta, Soejima, & Yauchi（2019）は、2007 年から 2016 年の東京における梅毒の感染者について分析を行った。その結果、2014 年（295 件）から 2015 年（759 件）、2016 年（1190 件）と梅毒の感染者数が急増していた。加えて、それまで男性と男性の性交が主たる梅毒の感染経路であったのに対し、2014 年からは男性と女性の性交による感染が急増しており、異性間の性交が主たる感染経路となっていることも明らかにされた。このような感染経路の変化は、全国の梅毒感染者でも同様に示されている（Takahashi et al., 2018）。

性感染症の増加や梅毒の感染経路の変化は、以前と比べ、性感染症が青年にとって身近なリスクとなっ

ていることを示唆する。また、性感染症へのリスク意識は、性交経験の不活性化とも関連する。片瀬（2019）は、2010 年と 2015 年に行われた高校生への調査から、特に女性において、性感染症へのリスク意識の低さが性交経験と関連することや、初交年齢の低さや性交経験人数の多さと関連することを明らかにした。したがって、青年の性行動をより深く理解するためには、性感染症の感染経験や性感染症へのリスク意識を踏まえる必要がある。

１－４　マッチングアプリの影響

こうした性感染症の増加や感染経路の変化の背景の一つとして、ソーシャル･ネット･ワーキング（SNS）のマッチングアプリ（出会い系アプリ）の流行が関連している可能性がある。マッチングアプリとは、インターネット上、多くはスマートフォン上で、アプリを利用しなければ知ることのできなかった相手と比較的簡単に知り合いになることができるアプリケーションである（鈴木，2019）。マッチングアプリの利用法は、登録をし、出会いを希望する相手を検索し、「いいね」とメッセージを送り、互いに「いいね」を送りあった後、メッセージを交換し、意気投合すれば会うという手順を踏むことが多い。

マッチングアプリは、異性との出会いや性交のきっかけとなることが示されている。例えば、橋元他（2015）が行った web 調査では、15 － 29 歳の未婚女性のうち 49％が「ネット上で異性と知り合いになった経験」を持ち、そのうちの 12％が「そういうつもりがないのに性的関係になった」と回答していた。日本性教育協会（2019）が全国の大学生を対象に行った調査では、「出会い系サイト・マッチングアプリを利用する」と回答した学生が、男子 9.9％、女子 7.1％で、「ネットやアプリで知り合った異性と直接会う」と回答した学生は、男子 9.8％、女子 11.1％であった。

その一方、マッチングアプリの利用は、出会いだけでなく、様々な性的問題とも関連しうる。例えば、羽渕（2019）は、マッチングアプリを利用した経験のある男子高校生や女子高校生、女子大学生に性的被害（言語的からかいや性的誘惑など）の経験が多いことを報告した。しかし、この傾向は、男子大学生では示されなかった。また、鈴木（2019）は、マッチングアプリと梅毒感染との関連について、都道府県別のデータに基づいて疫学的分析を行っている。その結果、マッチングアプリの都道府県別の利用率と 10 万人あたりの梅毒の感染率との相関係数は、$r = 0.64 - 0.76$ と極めて高くなっていた。一方、梅毒の感染率と都道府県への年間転入数や無店舗型性風俗特殊営業１号届出件数、海外旅行者数との間には高い相関は示されなかった。これらの結果は、梅毒の流行が、人口流入や無店舗性風俗への接触、海外旅行時の感染者への接触によるものではなく、SNS のマッチングアプリによる感染者への接触によるものであることを示唆している。

１－５　本研究の目的

以上より、近年利用者が増加しているマッチングアプリは出会いや性交のきっかけになると同時に、様々な性的問題や性感染症の温床となるおそれがある。しかし、これまでマッチングアプリの利用とリスクのある性交経験との関連は、直接的に検討されていない。鈴木（2019）は疫学的分析に基づくものであり、マッチングアプリの利用が、梅毒の感染などに結びつくリスクある性交経験と直接的に関連しているかは明確ではない。

そこで本研究では、18 － 29 歳の人々を対象にし、マッチングアプリの利用とリスクある性交経験との関連を分析する。リスクのある性交経験に関連する変数として、恋人がいる人との性交経験、恋人以外の人との性交経験、見知らぬ人との性交経験、既婚者との性交経験、首を絞めて性交するなどの危険な性交経験、金銭を受け取った性交経験、金銭を支払った性交経験、性病検査の経験、HIV/AIDS 検査の経験、性病の感染の経験を測定する。仮説は以下の通りである。

仮説１：マッチングアプリの利用経験者は未経験者に比べて、リスクのある性交経験の経験率が高い。

さらに、マッチングアプリ利用の心理的背景を明らかにするために、同アプリ利用者の心理特性も分析する。マッチングアプリ利用者の心理特性を分析する際、性的逸脱経験のある青年の心理特性に関する研究を参考にする。1997 年に首都 40 キロ圏内に在住する女子高校生を対象にした調査を行った福富（1998）

では、金品と引き換えにデートや性交を行う「援助交際」を経験した女子高校生は、親への肯定的感情、友人への同調、賞賛獲得欲求、流行への同調、金銭至上主義、ぬくもり希求などが高かった。また、成人男性の買春経験を調査した宇井他（2008）では、買春経験のある男性は、ぬくもり希求が強く、家族との情緒的な絆が弱かった。加えて、橋元他（2015）が2014年に実施したwebパネル調査（15 − 29歳）では、ネット上の見知らぬ人とのやりとりをしているか、今後してみたいと思っている女性は、孤独感、対人的疎外感、承認欲求、親和動機が高く、自尊心が低かった。これらの先行研究を参考に、賞賛獲得欲求、拒否回避欲求、ぬくもり希求、孤独感、自尊心を心理特性として取り上げ、リスクのある性交経験との関連を検討する。仮説は以下の通りである

仮説２：マッチングアプリの利用経験者は未経験者に比べて、賞賛獲得欲求や拒否回避欲求、ぬくもり希求、孤独感が高く、自尊心が低い。

なお、これらの仮説を検討するにあたり、様々な性行動調査や梅毒の感染率で性差が示されていることを踏まえ、男女別に分析を行うこととする。

２．方　　法

２－１　調査参加者

株式会社クロス・マーケティングが保有するインターネットパネルから、18歳から29歳であること、結婚経験がないこと、子どもがいないことを条件に600名を抽出した。この際、恋人がいる人の出現数が低いことが懸念されたため、恋人がいる人と恋人がいない人とが同程度になる、18 − 25歳／26 − 29歳、男女、恋人の有無について同数になるように、６層（年齢２水準、性別２水準、恋人の有無２水準）を設定し、各層75名ずつ割り当てた。

抽出された人の中から、２つの指示項目（「この項目では「してみたい」を選んでください」など）に対し、少なくとも片方に誤反応をした99名、恋人の有無が事前のスクリーニング調査と本調査で異なっていた17名を削除し、484名（男性239名、女性245名、平均年齢25.0歳、*SD*＝3.25）を分析対象とした。

分析対象者のうち恋人がいる人は242名であり、平均交際期間は28.2ヶ月（SD=31.36）であった。分析対象者の職業は、フルタイム労働者225名（46.4%）、パート・アルバイト・派遣職員83名（17.1%）、学生106名（21.9%）、無職52名（10.7%）、その他９名（1.9%）であった。

２－２　倫理的配慮

本研究は弘前大学人文社会科学部倫理委員会の倫理審査を受けて行われた（整理番号2019-02）。調査は、冒頭の画面で、性行動の経験や性行動への考え方について尋ねる質問があること、回答は統計的な処理を行うことにより個人を特定できない情報として使用されるため、プライバシーに関わる情報が公表されないこと、回答を中止することができることを明記し、これらに同意する人のみ回答ページへ進むよう教示した。

２－３　調査内容

マッチングアプリの利用経験　マッチングアプリの利用経験を測定するため、「マッチングアプリや出会い系アプリを使ったことがありますか。使ったことがある場合には、そのアプリを選択してください。使ったことがない場合には、『出会い系アプリは使ったことがない』を選んでください。」と教示し、多重回答形式で尋ねた。選択肢は「Tinder」「Omiai」「Paris」「カップル誕生」「セクシィ恋結び」「with」「その他」「出会い系アプリは使ったことがない」であった。本研究では「出会い系アプリは使ったことがない」の選択の有無（選択あり＝利用経験なし、選択なし＝利用経験あり）を変数として扱った。

リスクある性交経験　様々な性交経験を測定するため、独自に作成した５項目について、各行動への願望を尋ね、その中に、経験を意味する「したことがある」の選択肢を設けた（全選択肢は「したくない」「どちらかといえばしたくない」「どちらかといえばしてみたい」「してみたい」「したことがある」）。具体

的な内容は、「恋人のいる人とセックスをする」、「恋人以外の人とセックスをする」、「結婚している人とセックスをする」、「リスクのあるセックスをする（首をしめてセックスをするなど）」（以下では「危険な性交」と表記）、「お金を払ってセックスをする」、「お金をもらってセックスをする」、「見知らぬ人とセックスをする」であった。

性病、HIV・AIDS の受検と罹患経験　性病の検査経験と罹患経験、HIV・AIDS の検査経験について、経験の有無への回答を求めた。具体的な内容は、「性病の検査をしたことがある」、「HIV・AIDS の検査をしたことがある」、「性病（クラミジア、梅毒など）にかかったことがある」であった。

心理特性　心理特性を測定するため、以下の尺度を用いた。（1）賞賛獲得欲求と拒否回避欲求を測定するため、菅原（1986）の尺度を用いた。賞賛獲得欲求５項目、拒否回避欲求４項目によって構成されている。５件法（1．あてはまらない―5．あてはまる）で回答を求めた。（2）ぬくもり希求を測定するため、桜庭他（2001）の尺度を用いた。５項目について５件法（1．あてはまらない―5．あてはまる）で回答を求めた。（3）自尊心を測定するため、山本・松井・山成（1982）の自尊心尺度を用いた。10 項目について５件法（1．あてはまらない―5．あてはまる）で回答を求めた。（4）孤独感を測定するため、西村・村上・櫻井（2015）の孤独感尺度を用いた。この尺度は、子どもの孤独感を測定する尺度として作成されたものであるが、項目内容は大人でも利用可能であると判断されたため、本研究で用いることとした。４件法（1．まったくそう思わない―4．とてもそう思う）で回答を求めた。

２－４　分析の方針

性病や HIV・AIDS の検査経験や性病の感染経験、性行動の経験については、マッチングアプリの利用状況との関連を検討するため、クロス集計を行い、χ^2検定を行った。この際、性別を層とした Mantel-Haenszel 検定を行い、各経験とマッチングアプリの利用状況との関連が性別によって異なるかを検討した。

賞賛獲得欲求や拒否回避欲求、ぬくもり希求、自尊心、孤独感といった心理特性については、マッチングアプリの利用状況や性別によって得点が異なるかを検討するため、マッチングアプリの利用状況と性別を要因とする２要因分散分析を行った。

３．結　　果

３－１　マッチングアプリの利用状況

本研究の有効回答者のうち、マッチングアプリを利用したことがある人は 135 名（27.9％）であった。マッチングアプリの利用経験と性別、恋人の有無との関連を検討するため、χ^2検定を行った（Table 1）。恋人の有無を層とした Mantel- Haenszel 検定を行った結果、マッチングアプリの利用経験と性別の関連は恋人の有無で異なっていなかった（$S = 169,\ p = .70$）。χ^2検定の結果、マッチングアプリの利用経験と性別との関連は示されなかった（$\chi^2(1) = 0.11, p = .74,\ \phi = 0.01$）。また、マッチングアプリを利用した人のうち、異性と会った人は 105 名（21.7%）であった。

2014 年 12 月から 2015 年 1 月に実施された全国の調査結果（内閣府政策統括官、2015）における恋人の有無に関する結果を用いて、マッチングアプリ利用率のウェイトバック推定値を算出したところ、19.6％となった。さらに、職業を「学生」に限定して、マッチングアプリの利用率を算出したところ、男性 13.5%、女性 16.7％であり、日本性教育協会（2019）が全国の大学生を対象に行った調査（男子 9.9％、女子 7.1%）よりやや高くなっていた。

Table 1　マッチングアプリの利用状況のクロス集計表

	アプリ利用			
	恋人なし		恋人あり	
性別	なし	あり	なし	あり
男性	101	19	68	49
女性	99	21	79	46

Mantel- Haenszel 検定　$S = 169,\ p = .70$
$\chi^2(1) = 6.87,\ p = .01,\ \phi = 0.17$

3－2　マッチングアプリ利用と性病検査、HIV・AIDS 検査、性病罹患の関連

マッチングアプリの利用状況と性交経験との男女ごとのクロス集計表を Table 2 から Table 8 に示す。性別を層とした Mantel- Haenszel 検定を行った結果、いずれのクロス集計も性別によって結果が異なっていた（$Ss > 322$, $ps < .03$）。

男女ごとに χ^2 検定を行った結果、恋人がいる人との性交（Table 2）、恋人以外の人との性交（Table 3）、見知らぬ人との性交（Table 4）は、男女ともにマッチングアプリの利用との関連が示された。残差分析の結果、男女ともに、アプリ利用経験がある場合に、これらの性交経験が有意に多かった。

既婚者との性交（Table 5）、首締めなどの危険な性交（Table 6）、金銭を受け取った性交（Table 7）は、女性のみでマッチングアプリの利用との関連が示された。残差分析の結果、マッチングアプリを利用した経験のある女性は、これらの性交経験が有意に多かった。また、金銭を支払った性交（Table 8）は、男性のみでマッチングアプリとの関連が示された。残差分析の結果、マッチングアプリの利用経験がある男性は、金銭を支払った性交が有意に多かった。

3－3　マッチングアプリ利用と性病検査、HIV・AIDS 検査、性病罹患の関連

マッチングアプリの利用状況と性病検査の経験や HIV・AIDS 検査の経験、性病の感染経験の男女ごとのクロス集計表を Table 9 － 11 に示す。性別を層とした Mantel- Haenszel 検定を行った結果、いずれのクロス集計も性別によって結果が異なっていた（$Ss > 338$, $ps < .001$）。

Table 2　マッチングアプリの利用状況と恋人がいる人との性交経験のクロス集計表

	恋人がいる人との性交							
	男性				女性			
アプリ利用	なし		あり		なし		あり	
なし	160	△	9	▼	169	△	9	▼
あり	52	▼	16	△	57	▼	10	△

Mantel- Haenszel 検定　$S = 329$, $p = .00$
男性　$\chi^2(1) = 17.03$, $p = .00$, $\phi = 0.27$
女性　$\chi^2(1) = 6.63$, $p = .01$, $\phi = 0.16$

Table 3　マッチングアプリの利用状況と恋人以外の人との性交経験のクロス集計表

	恋人以外の人との性交経験							
	男性				女性			
アプリ利用	なし		あり		なし		あり	
なし	157	△	12	▼	165	△	13	▼
あり	44	▼	24	△	54	▼	13	△

Mantel- Haenszel 検定　$S = 322$, $p = .00$
男性　$\chi^2(1) = 29.91$, $p = .00$, $\phi = 0.36$
女性　$\chi^2(1) = 7.51$, $p = .01$, $\phi = 0.18$

Table 4　マッチングアプリの利用状況と見知らぬ人との性交経験のクロス集計表

	見知らぬ人との性交							
	男性				女性			
アプリ利用	なし		あり		なし		あり	
なし	163	△	6	▼	176	△	2	▼
あり	54	▼	14	△	62	▼	5	△

Mantel- Haenszel 検定　$S = 339$, $p = .00$
男性　$\chi^2(1) = 18.22$, $p = .00$, $\phi = 0.28$
女性　$\chi^2(1) = 7.05$, $p = .01$, $\phi = 0.17$

Table 5　マッチングアプリの利用状況と既婚者との性交経験のクロス集計表

	既婚者との性交経験							
	男性				女性			
アプリ利用	なし		あり		なし		あり	
なし	161		8		171	△	7	▼
あり	63		5		59	▼	8	△

Mantel- Haenszel 検定　$S = 332$, $p = .03$
男性　$\chi^2(1) = 0.64$, $p = .42$, $\phi = 0.05$
女性　$\chi^2(1) = 5.43$, $p = .02$, $\phi = 0.15$

Table 6　マッチングアプリの利用状況と首絞めなどの危険な性交経験のクロス集計表

	首絞めなどの危険な性交					
	男性			女性		
アプリ利用	なし		あり	なし		あり	
なし	165		4	178	△	0	▼
あり	63		5	63	▼	4	△

Mantel- Haenszel 検定　$S = 343$, $p = .00$
男性　$\chi^2(1) = 3.30$, $p = .07$, $\phi = 0.12$
女性　$\chi^2(1) = 10.80$, $p = .00$, $\phi = 0.21$

Table 7　マッチングアプリの利用状況と金銭を受け取った性交経験のクロス集計表

	金銭を受け取った性交					
	男性			女性		
アプリ利用	なし		あり	なし		あり	
なし	165		4	175	△	3	▼
あり	65		3	62	▼	5	△

Mantel- Haenszel 検定　$S = 340$, $p = .04$
男性　$\chi^2(1) = 0.71$, $p = .40$, $\phi = 0.05$
女性　$\chi^2(1) = 5.14$, $p = .02$, $\phi = 0.15$

Table 8　マッチングアプリの利用状況と金銭を支払った性交経験のクロス集計表

	金銭を支払った性交					
	男性				女性	
アプリ利用	なし		あり		なし	あり
なし	162	△	7	▼	178	0
あり	45	▼	23	△	67	0

Mantel- Haenszel 検定　S = 340, p = .00
男性　$\chi^2(1)$ = 38.64, p = .00, ϕ = 0.40

Table 9　マッチングアプリの利用状況と性病検査経験のクロス集計表

	性病検査							
	男性				女性			
アプリ利用	なし		あり		なし		あり	
なし	161	△	8	▼	170	△	8	▼
あり	58	▼	10	△	54	▼	13	△

Mantel- Haenszel 検定　S = 331, p = .00
男性　$\chi^2(1)$ = 6.87, p = .01, ϕ = 0.17
女性　$\chi^2(1)$ = 13.81, p = .00, ϕ = 0.24

Table 10　マッチングアプリの利用状況と HIV・AIDS 検査経験のクロス集計表

	HIV・AIDS 検査							
	男性				女性			
アプリ利用	なし		あり		なし		あり	
なし	166	△	3	▼	175	△	3	▼
あり	63	▼	5	△	62	▼	5	△

Mantel- Haenszel 検定　S=341, p=.00
男性　$\chi^2(1)$ = 4.63, p = .03, ϕ = 0.14
女性　$\chi^2(1)$ = 5.14, p = .02, ϕ = 0.15

Table 11　マッチングアプリの利用状況と性病感染経験のクロス集計表

	性病感染							
	男性				女性			
アプリ利用	なし		あり		なし		あり	
なし	165		4		173	△	5	▼
あり	64		4		58	▼	9	△

Mantel- Haenszel 検定　S=338, p=.00
男性　$\chi^2(1)$ = 1.83, p = .18, ϕ = 0.08
女性　$\chi^2(1)$ = 10.20, p = .00, ϕ = 0.20

男女ごとにχ^2検定を行った結果、性病検査の経験（Table 9）と HIV･AIDS 検査の経験（Table 10）は、男女ともにマッチングアプリの使用経験との関連が示された。残差分析の結果、男女ともに、アプリ利用経験がある場合に、性病や HIV・AIDS の検査の経験が有意に多かった。

性病の罹患経験（Table 11）は、女性のみマッチングアプリの利用経験との関連が示された。残差分析の結果、マッチングアプリを利用した経験のある女性は、性病の罹患経験が有意に多かった。ただし、マッチングアプリ利用経験者の女性の中で、性病に罹患していた人は 13.4％に過ぎない点にも留意が必要である。

３－４　心理特性の記述統計量およびアプリ利用との関連

本研究で使用した各変数の α 係数を算出した結果、いずれも十分な内的一貫性が確認された（Table 12）。そこで先行研究に倣って尺度得点を算出した。

マッチングアプリの利用や性別によって各変数の得点が異なるかを検討するため、マッチングアプリの利用と性別を要因とした２要因分散分析を行った（Table 12）。その結果、マッチングアプリ利用の主効果は、賞賛獲得欲求（$M_{なし}$=2.68, $M_{あり}$=3.01, Cohen's d = 0.32）とぬくもり希求（$M_{なし}$=3.14, $M_{あり}$=3.40, Cohen's d = 0.25）で示され、ともにアプリ利用経験がある人の得点が高かった。一方、性別の主

Table 12　本研究で使用した変数の記述統計量および分散分析の結果

マッチングアプリの利用経験		なし			あり			分散分析 [a)]			
		n	M	SD	n	M	SD		アプリ利用	性別	交互作用
賞賛獲得欲求（α = .91）	男性	169	2.72	0.95	68	3.13	1.03	F	9.74*	2.43	0.64
	女性	178	2.64	1.06	67	2.88	1.11	η_p^2	0.02	0.01	0.00
拒否回避欲求（α = .85）	男性	169	3.13	1.01	68	3.22	1.04	F	0.28	1.59	2.20
	女性	178	3.41	0.97	67	3.20	1.00	η_p^2	0.00	0.00	0.00
ぬくもり希求（α = .90）	男性	169	2.95	0.95	68	3.36	1.03	F	6.34*	5.02*	2.16
	女性	178	3.34	1.06	67	3.44	1.11	η_p^2	0.01	0.01	0.00
自尊心（α = .84）	男性	169	2.93	0.64	68	3.06	0.58	F	2.77	1.10	0.18
	女性	178	2.89	0.64	67	2.97	0.71	η_p^2	0.01	0.00	0.00
孤独感（α = .88）	男性	169	2.33	0.80	68	2.34	0.71	F	0.11	2.40	0.24
	女性	178	2.49	0.82	67	2.42	0.82	η_p^2	0.00	0.01	0.00

* p < .05
a) 分散分析の自由度はいずれも df_1 = 1, df_2 = 478 である。

効果はぬくもり希求で示され、女性が男性よりも得点が高かった（$M_{男性}$=3.16，$M_{女性}$=3.39，Cohen's d = 0.22）。ただし、これらの得点差の効果量は小さいものであることには注意が必要である。

4．考　　察

本研究の目的は、青年や成人（18 歳から 29 歳）におけるマッチングアプリの利用とリスクのある性交経験との関連を明らかにし、マッチングアプリを利用する心理的背景を検討することであった。

本研究の有効回答者の内、マッチングアプリを利用した経験がある人は 27.9％（ウェイトバック推定値 19.6％）であり、性別や恋人の有無による差はみられなかった。したがって、マッチングアプリ利用経験が青年層の２割程度に広がっていることが確認された。

４－１　マッチングアプリ利用経験とリスクある性交経験との関連

多くのリスクのある性行為には、マッチングアプリの利用経験による差がみられた。

男女ともに、恋人がいる人との性交、恋人以外の人との性交、見知らぬ人との性交の経験は、アプリ利用経験がある場合に有意に多かった。また、性病検査の経験、HIV・AIDS 検査の経験も、男女ともに、アプリ利用経験がある場合に有意に多かった。これらの結果から、作業仮説１は、多くの性交経験で支持された。性病に関する結果は、鈴木（2019）の疫学的研究の知見を裏付けるものと考えられる。

さらに、男性においてのみ、金銭を支払った性交がマッチングアプリ利用経験のある場合に多かった。一方、女性においてのみ、既婚者との性交、首締めなどの危険な性交、金銭を受け取った性交、性病の罹患経験が、マッチングアプリ利用経験のある場合に多かった。ただし、マッチングアプリ利用経験者の女性の中で、性病に感染した経験がある人は 13.4％であった。

これらの結果から、マッチングアプリは、特定のパートナー以外の人物との性交機会を得る場として利用されやすいことが推察される。マッチングアプリを利用し、パートナー以外の人物との性交機会が多くなることによって、性病への感染も多くなる可能性が考えられる。性病の予防にはコンドームの着用が有効である。しかし、木原（2006）は、１年間の性交経験人数が多い人ほどコンドームを着用しない性交をした経験が多いことを指摘している。木原（2006）を踏まえれば、マッチングアプリで不特定多数の人物と性交している人と出会い、その際にコンドームを着用しない性交を行った場合、性感染症に感染するリスクは大きくなる。そのことが、男女ともにマッチングアプリの利用経験がある人が、性病の検査や HIV・AIDS の検査が多いことの一因となっている可能性があろう。ただし、木原（2006）のデータは 1999 年のものである。高校生や大学生の性に関する知識の定着が不十分であること（中澤，2019）などを踏まえれば、同じ傾向が現在でも示される可能性があるが、今後の検討が必要である。

さらに、マッチングアプリの利用経験のある女性は、既婚者との性交や首締めなどの危険な性交、性病罹患も多くなっており、男性よりリスクの高い性行動をとっていた。この理由は明確ではないが、20 代女性の梅毒罹患者の増加や、小林（2019）が指摘する若い女性層の「肉食化」と整合する結果と考えられる。その一方、これらの結果には、危険な性的行為の被害者としての女性が反映されている可能性もある。性交はコンドームの着用をはじめとして、男性が主導権をもちやすく、その中での勢力関係の弱い女性が被害者となりやすい。羽渕（2019）は女子大学生においてマッチングアプリの利用経験と性的被害とが関連するのに対し、男子大学生では関連しないことを報告した。この傾向が大学生以降でも生じるかは明らかではないものの、羽渕（2019）の結果を踏まえれば、マッチングアプリを利用した成人女性が危険な性交を行う男性の被害を受けている可能性は十分に考えられよう。

４－２　マッチングアプリ利用経験と心理特性との関連

マッチングアプリの利用経験ある人は、効果量は小さかったものの、賞賛獲得欲求とぬくもり希求が強いことが明らかになった。以上より、仮説２は一部支持されるにとどまった。これらの得点差と、男性においてマッチングアプリの利用経験と金銭を支払った性交（買春）との関連が示されたこと、女性におい

てマッチングアプリの利用と金銭受け取った性交（売春）との関連が示されたことをあわせて考えれば、マッチングアプリ利用の一部が売買春につながっている可能性がある。同時に、その背景要因は、桜庭他（2001）や宇井他（2008）が明らかにした援助交際の背景要因と類似性を持つ。桜庭他（2001）は、援助交際を行う女性の背景要因に、賞賛獲得欲求やぬくもり希求があることを明らかにした。宇井他（2008）は、買春経験のある男性の背景要因にぬくもり希求があることを明らかにした。これらの結果を踏まえれば、本調査の対象者の一部は、マッチングアプリを通した他者との交流や出会いによって、賞賛を得たり、さみしさを紛らわせたりすることを目的とした利用をしている可能性がある。桜庭他（2001）が調査を行った1997年や宇井が調査を行った1999年から20年程度が経過した現在では、他者との出会う手段が変化しており、マッチングアプリがその役割を果たしていることも考えられよう。一方、他の心理的特徴にはアプリ利用経験による差がみられなかった。この理由は明確ではないが、アプリ利用経験者が20％前後いるため、多様な心理的背景を持つ層で構成されている可能性が考えられる。

４－３　本研究の結論と制約

本研究の結論は、マッチングアプリを利用した経験のある青年（18－29歳）は、排他性の低い性交経験が多く、性感染症やHIV/AIDS検査の受検経験も多く、買売春と見なせる経験も多いことである。また、女性では性病罹患率も高く、リスクのある性行為の経験が多い。心理的には、賞賛獲得欲求とぬくもり希求が強いという特徴も示された。したがって、マッチングアプリの利用が青年や成人にとって性的逸脱行為や性感染症のリスクとなる可能性がある。

しかし、マッチングアプリには危険しかないとは言い切れない。国立社会保障･人口問題研究所（2015）による第15回出生動向基本調査によれば、結婚意思がある独身者の結婚しない理由として、「適当な相手にめぐり会わない」を理由として挙げる人が多い。そのような状況において、マッチングアプリは多くの人との出会いをもたらす有益なアプリになりうるであろう。したがって、マッチングアプリについては、その有益性とリスクを踏まえた利用の仕方が重要となってくる。

マッチングアプリを有効に利用するための対策として、性教育や関係性教育によるアプローチが考えられる。全国性教育協会（2019）は、高校生や大学生の避妊や性病についての知識が年々低下している傾向にあること、学校における性教育が性行動に関する自己決定と結びついていない可能性があること、性被害の経験がある人が性に関する話を友人としていることや、性行動への態度が仲間関係に影響されることを報告している。このような状況から考えられることは、性教育をより充実させる必要性であろう。実際、秋田県での性教育の取り組みのように人工中絶が減少した例もある（志賀，2015）。また、東京都教育委員会（2019）では、自画撮り画像のトラブル（sexting）などを含むSNSでのトラブル、性病やHIV・AIDSの感染などの扱いを含む性教育の手引きを作成している。この手引きでは、学習指導要領に記載されていない事項の扱いやその際の保護者への周知など実践的な内容も含まれており、この手引きを活用した今後の展開が期待される。加えて、リスクのあるセックスや性病の予防に対して有効なコミュニケーションを行えるコミュニティを醸成していくことも手段として考えられよう。この際、第３者の存在がDV予防につながる可能性（相馬・杉山・山中・門馬・伊藤，2017）も踏まえ、性に関する事柄だけではなく、よりよい関係について考えられるようなコミュニケーションが可能なコミュニティを育んでいくことが望まれる。

ただし、本研究の結論には下記の制約がある。第１に、本研究はwebパネル調査に基づくものである。性に関する調査は対面でないと正確さに欠けるという指摘（内野，1996）があり、webパネル調査の回答者には一定の偏りがあると指摘（大隅，2008など）もある。実際に、本研究のマッチングアプリの利用経験率は、大学で調査された日本性育協会（2019）の利用率より高くなっていた。この結果は、本調査の回答者がマッチングアプリの利用に親和性のある回答者にやや偏っていたことを示唆する。本研究では方法に記述したようにweb調査の回答バイアス（三浦･小林，2015）を防ぐ工夫は行ったが、今後、対面調査などによる検証が必要と考えられる。

第２に、本研究で測定したリスクのある性行為時に、マッチングアプリを利用したかについては直接尋ねていない。アプリ利用経験者に、リスクのある性行為経験が多いという関連を検討したにとどまっている。この点についても、今後の検証が必要である。

第３に、マッチングアプリ経験者にリスクある性行為が多いことは明らかになったが、同アプリ経験者すべてが、リスクある性行為をしているのではない。たとえば、アプリ経験者の性感染症の罹患率は13％に過ぎない。心理特性に関しても、買売春研究で明らかにされている心理的特徴はほとんどみられなかった。アプリ経験のリスクある性交経験への影響に関して過度の一般化を行わないように留意したい。

引用文献

AIDS/STI related database Japanのホームページ　http://www.aidssti.com/m_008_001.html　2019年12月26日ダウンロード.

福富　護（編）(1998).『援助交際』に対する女子高校生の意識と背景要因　(財)女性のためのアジア平和国民基金発行.

羽渕　一代（2019）．性的被害と親密性からの／への逃避　日本性教育協会（編）「若者の性」白書―第８回青少年の性行動全国調査報告―　小学館　147-163.

橋元　良明・千葉　直子・天野　美穂子・堀川　裕介（2015）．ソーシャルメデイアを介して異性と交際する女性の心理と特性　東京大学大学院情報学環情報学研究調査研究編，*31*, 115-195.

石川由里香（2019）．青少年の性規範・性意識からみる分極化現象　日本性教育協会（編）「若者の性」白書―第８回青少年の性行動全国調査報告―　小学館　pp. 47-67.

片瀬　一男（2018）．21世紀における親密性の変容　林雄亮（編）　青少年の性行動はどう変わってきたか―全国調査にみる40年間―　ミネルヴァ書房　pp. 173-198.

片瀬　一男（2019）．第８回「青少年の性行動全国調査」の概要　日本性教育協会（編）「若者の性」白書―第８回青少年の性行動全国調査報告―　小学館　9-28.

木原　雅子（2006）．10代の性行動と日本社会―そしてWYSH教育の視点　ミネルヴァ書房.

小林　盾　2019　若者の恋愛―誰が草食化したのか　小林盾・川端健嗣（編）　成蹊大学太平洋研究センター叢書　変貌する恋愛と結婚　データで読む平成　新曜社　pp. 13-34.

国立社会保障･人口問題研究所（2015）．　現代日本の結婚と出産― 第15回出生動向基本調査（独身者調査ならびに夫婦調査）報告書 ―　国立社会保障・人口問題研究所.

厚生労働省（2019）．　性感染症報告数　https://www.mhlw.go.jp/topics/2005/04/tp0411-1.html

増田　匡裕（1994）．恋愛関係における排他性の研究　実験社会心理学研究，*34*, 164-182.

松井　豊（2016）．恋愛とカップル形成の実証研究　家族療法研究，*33*, 171-177.

三浦　麻子・小林　哲郎（2015）．オンライン調査モニタのSatisficeに関する実験的研究　社会心理学研究，*31*，1 -12.

森岡　正博（2011）.「草食系男子」の現象学的考察　The review of Life Studies, 1, 13-28.

日本医師会師（2019）．記者会見資料　http://dl.med.or.jp/dl-med/teireikaiken/20180905_21.pdf

日本性教育協会（2019）.「若者の性」白書―第８回青少年の性行動全国調査報告―　小学館.

西村　多久磨・村上　達也・櫻井　茂男（2015）．子ども用孤独感尺度（Five-LSC）の作成　心理学研究，*86*, 368–373.

中澤　智惠　（2019）．知識・態度・行動の観点からみた性教育の現状と今後の課題　　日本性教育協会（編）「若者の性」白書第８回青少年の性行動全国調査報告　小学館　pp. 89-105.

大隅　昇（2008）．これからの社会調査―インターネット調査の可能性と課題―　日本健康教育学会誌，*16*, 196-205.

櫻庭　隆浩･松井　豊･福富　護･成田　健一･上瀬由美子･宇井美代子･菊島　充子（2001）．女子高校生における『援助交際』の背景要因　教育心理学研究，*49*, 167-174.

志賀くに子（2015）．　秋田県内の中学生・高校生を対象とした性教育講座の実際　日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学紀要，*20*, 77-80.

相馬　敏彦・杉山　詔二・山中　多民子・門馬　乙魅・伊藤　言（2017）．若者のDV被害を予防するプログラムの効果検

証―DV被害の脆弱性モデルを基盤として―　日工組社会安全財団　2015年度一般研究助成研究報告書，1-26.
菅原　健介（1986）．賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求　心理学研究，*57*, 134-140.
鈴木　陽介（2019）．SNSによる「出会いの変化」が梅毒増加の原因か？　現代性教育研究ジャーナル，*98*, 1-5.
Sugishita, Y., Kayeeta, A., Soejima, K., & Yauchi, M.（2019）. Rapid increase of syphilis in Tokyo: an analysis of infectious disease surveillance data from 2007 to 2016. *Western Pacific Surveillance and Response*, *10*, 6-14.
Takahashi, T., Arima, Y., Yamagishi, T., Nishiki, S., Kanai, M., Ishikane, M., ... & Oishi, K.（2018）. Rapid Increase in Reports of Syphilis Associated With Men Who Have Sex With Women and Women Who Have Sex With Men, Japan, 2012 to 2016. *Sexually transmitted diseases*, *45*, 139-143.
東京都教育委員会（2019）．性教育の手引　東京都教育委員会.
東京都幼・小・中・高・心性教育研究会（2014）.「児童・生徒の性に関する調査」 現代性教育研究ジャーナル，*45*, 1-6.
内野　英幸（1996）．一般住民の性意識と性行動に関する比較社会学的研究　日本性科学会雑誌，*14*, 3-17.
宇井美代子・松井　豊・福富　護・成田　健一・上瀬由美子・八城　薫（2008）．成人男性の買春行動および買春許容意識の規定因の検討　心理学研究，*79*, 215-231.
山本真理子・松井　豊・山成由紀子（1982）．認知された自己の諸側面の構造　教育心理学研究，*30*, 64–68.